

「函館キャンプ」十八年の歩みを振り返って

出席者 久山喜久雄（大学学生課学生係長）

三山 雅子（大学文学部助教授）

沖田 行司（大学文学部教授）

百合野正博（大学商学部助教授）

司会 伊藤 彌彦（大学法学部教授）

〈ABC順〉

同志社の心が育つ旅

伊藤 本日は、函館キャンプについての座談会ということで、キャンプに参加した経験のある方々にお集まりいただきました。まずスタッフ側としてこのキャンプを毎年準備していただいている学生課から函館キャンプの歴史的経緯やスタッフとしての苦労話をお話しいただきましよう。

久山 函館キャンプは大学の課外活動行事として毎年行っています。キャンプが企画された背景として、当時はスチュー

デント・アパシーなどということがいわれ、学生の間は無気力が蔓延している状況があり、大学としてもこのことに対して何かできないものか、つまり学生個々人が大学に主体的に関わっていくためのきっかけが提供できないものかと検討した結果、キャンプの構想が持ち上がったと聞いています。

一九八一年に最初のフレッシュマンキャンプが清里で行われました。その時は、安中を経由して清里に入ったそうです。その後二年生以上も対象にしなければならぬという議論があり、翌年、「シニア

キャンプ」と銘打ってはじめて函館でキャンプが行われました。同志社大学として特色ある内容にしていくなにも、創立者新島襄との関わりのある函館が選ばれたということです。八三年から「新島シニアキャンプ」という名称に変わり、現在の「函館キャンプ」の原型ができ、八六年に「函館キャンプ」と再度名称を変え、現在に至っています。年中行事として学内でも認知され、学生間でもその存在が定着して、今回で十八回を終了することができました。その間、宿泊場所である函館市青少年研修センターも旧

ロシア領事館から現在のるるぶ函館へ変わっていますし、第七回から第十回については、応募者多数のため年二回行っていました。

スタッフとしては、キャンブの主旨に沿った活動内容や学生の要望の受け入れなど、プログラム構成の細かな検討にいろいろ苦労がありました。列車や宿舎での過ごし方にも気を使います。募集から実施までいろいろな準備があります。キャンブが終了すると、その年の十二月にはもう次年度の宿泊先や列車の予約を始めます。そして、五月に入り説明会と募集、受付が始まります。五月中には参加者が決定します。それから八月の実施日までに、参加者は三回のミーティングを行います。そこで、どんなキャンブにしたいのか学生自身が案を出し、練り上げていくのです。私たちも直前まで現地や学生との連絡、調整をしながら当日を迎えます。

伊藤 近年の学生の応募状況はいかがなものですか。

久山 去年が百六人、今年は七十七人の応募がありました。以前に比べると応募

は減少傾向にありますが、それでも五十人枠です。から抽選に漏れる人は出るわけですね。

伊藤 ありがとうございます。では、実際に引率された先生方から感想を一言ずつ伺ってまいりたいと思います。

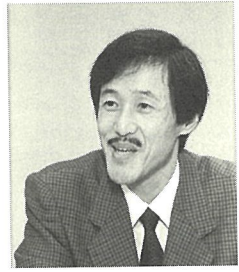
三山 昨年初めてキャンブに参加させていただいて感じたことは、学生たちは同志社らしさを求めて同志社に入学してきているんだということですね。そして同志社らしさの源はというと、やはり創立者の新島先生にあるわけで、その新島先生の脱国の地を訪れ、卒業生の方々と一緒になってその足跡を巡りながら体験していくというのが、同志社の伝統を知ることでも貴重な場を提供していると感じました。それと、私はたまたま四日間学生たちと同じ部屋だったんですが、学生たちが授業を離れて、何気ない生活の中で教員と接することを欲しているんだなと感じて帰ってきました。

百合野 五年前、引率して参りました。事前に聞いていた話では、かなりの過密スケジュールで、しかも学生たちと雑魚寝するということで、悲壮な思いで参加し

たわけですが、実際に行ってみますと学生時代の合宿を思い出しまして、たいへん楽しい思いをさせていただきました。

私は学生時代から若王子の墓参には何度も行っていますが、函館は初めてで感慨もありましたね。感激のあまりそれ以降ゼミ合宿を函館で企画するようになりました。最初は函館キャンブと同じスケジュールで行っていたのですが、昨年は函館の後、ラフティングをやり、温泉に入ってから離れた贅沢なものになったので、今年はちよつとお休みしました。

沖田 私は、一九八五年と一九九四年の二回参加しています。このキャンブの良いところは、参加者の中にはクラブにもサークルにも入ることなく孤独な学生生活を送っている学生もいるわけですが、彼らが、大きく変わっていくという点ですね。最初に出会った頃は班に分かれても、あまりみんなと話をしている様子もないし、「大丈夫かな」と心配になるような彼らが、三日間の合宿を経て、みるみるみんなと打ち解けていく。それを目のあたりにしていると感動的でさえありま



久山喜久雄氏

ひさやま きくお／1954年熊本県生まれ。1978年同志社大学社会学科卒業。同年同志社大学職員となる。日本環境教育学会に所属し、地域での環境教育活動を実践する。主な著書に『日本型環境教育の提案』（共著、1992年）小学館。『森の教室』（共編著、1995年）『身近なときめき自然散歩』（共編著、1998年）淡交社などがある。

したね。もう一点は、われわれも引率者という立場ではありますが、学生たちと一緒にしゃげるといいますか、学生の自主性を重んじるという立派なことを言いつつ、自分たちも結構好きなことをやって学生に迷惑をかけたりもしている（全員笑）。建前では私たちが学生を支えているはずなだけけど、ある意味では学生たちも私たちを支えてくれているといえますか、そういう関係が生まれてくる。ゼミや専攻では体験できない人間関係が生まれるという感じですね。

伊藤 先生方の熱のこもった話はキャンブがうまくいっている証拠だという気がするんですが、久山さんはスタッフとして参加してどのように感じていますか。久山 私たちとしてはまずキャンブをや

り逃げないといけないという使命がありまして、スケジュールを目の前にして精一杯やっているというのが実感です。

伊藤 スケジュールに支障が生じないように学生たちや先生方の逸脱行為を目を大きくして見守っていると：（笑）。

久山 そういう事もあるかもしれませんが：（苦笑）。一方、沖田先生のお話にありましたように、大丈夫かな、集団生活をしていけるんだろうかと思えるような学生が、みんなと打ち解けていく様子を見てみると、学生が変わっていくというより、学生が本来持っているものを素直に出せる雰囲気をつくる一団が作り出しているんだと思い、勇気づけられます。参加者全員を信頼していいんだと思えるようになりますね。そう考えるとスタッフと

しても参加者に助けられている。まさに参加者が作っているキャンブだなという実感が持てますね。それからもう一つ印象的なのは、大学に帰ってからキャンパスで参加者に出会ったと彼ら、彼女たちが進んで挨拶をしてくれるんですね。キャンブをきっかけとして新しい人間関係が生まれてくるんです。

沖田 帰ってからコンパとかね、お誕生日会なんかをしていただいたりしてね。昔、同志社が小さな所帯だった頃は、こんな雰囲気の中で教育していたんだなという気がしてきましたね。これが大きくなると、同じ学部でも挨拶さえ交わさない。

伊藤 大規模学部になると一クラスの規模が三百人とか、ひどい場合は八百人と



三山雅子氏

みつやま まさこ／1957年北海道札幌市生まれ。1989年北海道大学教育学研究科博士後期課程単位取得退学。1992年日本労働研究機構雇用職業構造担当研究員。1995年同志社大学文学部専任講師、1998年助教授。最近の論文に『能力主義の浸透と終身雇用の動揺』（『大阪社会労働運動史』第8巻所収、有斐閣）がある。

かで、あとはゼミだけですからね。学生とすれば、本来持っている自分をクラスでは到底出せない現実があります。その点このような課外活動は教育効果は大きいですね。

三山 函館キャンプでも、最初みんなが顔合わせする段階ではまだどこちないんです。それが、出来合いのものでなくキャンプは自分たちで作っていくんだということが分かった頃から雰囲気が大きく変わってくるんです。

伊藤 かなりの学生は、最初は修学旅行のイメージで参加したというんですね。すべてを仕切られ、命令一下みんなが動かないといけないような。でも実際にキャンプを経験すると、いい意味で期待を裏切られたと語っていました。

三山 自由に作っていけるキャンプだし、参加者もまた自分たちで作っていいこうとするところが同志社らしさなんだと思います。

百合野 最近では受け身の学生が多くて、ゼミや合宿でもなかなか自分たちで動くうとしない。しかし、函館キャンプは特別なんです。自分たちで考えて自分たちが動く。三十年前の学生時代を思い出させるような学生たちの意気を感じましたね。

沖田 われわれは意識して管理しないように心掛けているんですが、私が学生に「キミ、ちよっとお酒を買ってこい」というと、学生は「やめときましよう」という。「いいから、買ってこい」と私が食い下がる、「先生、お願いですからやめに

しましょう」と学生がダメを出す。こういう教師と学生の関係に学生自身もびっくりするんですね。食事の後も、隠し持ったお酒をちびちびやる。揚げ句の果てにジェンカなんかを踊り出す、心臓をパクパクさせながらね。そんな教師の姿に学生も非常に親近感を抱くようです。

伊藤 行きの夜行列車がいいんじゃないですか。それと最初の寝台車の座席割を男女混合で割り振りますよね。これで男子、女子のグループに分離する垣根が崩される。

三山 卒業生の方の参加も大きいですね。社会経験を持った方と学生が時間を共有するというだけでなく卒業生の方々の参加が、現在の教職員だけではとてもできない同志社の伝統の継承というもの



百合野正博氏

ゆりの まさひろ／1949年京都市生まれ。1976年同志社大学大学院商学研究科修士課程修了。同年商学部助手、専任講師を経て1985年商学部助教授。主な著書に『日本の会計士監査』（森山書店 1999年）、『ウォーレスの監査論』（共訳書、同文館 1991年）、『会計原則の展開』（共訳書、森山書店 1981年）など。ほかに論文・学会報告など多数。

を可能にしているように思いますね。

久山 そうですね。函館の持っている特殊性ですね、街全体が自由で、あたたかな雰囲気を持っていて、かつ今お話に出たように卒業生が結構いらっしゃるというところが目に見えない支えになってキャンプの可能性を広げているんじゃないかという気がします。研修センターに函館キャンプの第一回から係わっている方がいらしたのですが、その方が「毎年毎年、今年はどんな学生が来るのか楽しみで楽しみで」とおっしゃる。こういう話を聞くにつけ、函館キャンプはひと言ではいい尽くせない魅力を持っているんだなあと改めて感じます。

沖田 このキャンプの主旨は、新島襄の足跡を辿ることなんです、中に

は口には出さないけれど「何が新島だ」という思いの学生もいるんだと思います。ところが、新島の足跡を辿っていくにつれ、その存在が彼らの心のどこかに染み込んでいく。

伊藤 初めから新島を押しつけないからいいんじゃないかな。先ほど三山先生が学生は同志社らしさを求めているとおっしゃいましたが、結果としてそうなるのかもしれないが、最初から新島を知っている学生が行ってるわけではなく、むしろ多くは学生としてのアイデンティティを求めて参加しているわけですね。

百合野 でも、函館に行ったからといって新島の事が分かるかといえば何も分からない。観光センターに行っても同志社や新島に関するものは何も置いていな

い。函館というのは元来イカの街なんです。イカはいっぱいあるけど、新島襄に関連するものは、あの碑のほかは目立たない。ただ団体で行き、その醸し出す雰囲気の中に何かがあるんですね。あの碑の前に立って海の方を見るとやっぱり感動してしまいます。ゼミで行った時も、自然とカレッジソングを歌おうという雰囲気が生まりました。

久山 今年のキャンプでは、函館の人にインタビューするという企画でビデオを製作したんです。その中で「あなたは新島襄を知っていますか」という質問項目があつて、だいたい年配の人は知っているが、若い人はほとんど知らない。インタビューした学生たちは一様に残念だという顔をするんですね。新島を求めている



沖田行司氏

おきた ゆくじ／1948年京都府生まれ。1979年同志社大学大学院文学研究科博士課程（後期課程）修了。1981年専任講師、1984年助教授、1990年教授。1989年から1年間米国ハワイ大学日本研究所客員教授。博士（文化史学）。日本教育の近代化と伝統思想に関する研究に取り組んでいる。主な著書に『日本近代教育の思想史研究』（日本図書センター 1992年）、『ハワイ日系移民の教育史』（ミネルヴァ書房 1997年）などがあつた。「日本教育史」などを担当。

るわけじゃないのに、函館の人が知らないという現実に触れ「自分は、同志社大生なのに」と逆に新島への思いに駆られるようです。

学部を越えた出会いを作る

伊藤 ここで話題を変えて、函館キャンプは出会いの場であり、学生と学生、さらに学生と教員が打ち解けあえるという話が出ていたと思うのですが、なぜキャンプがそうした関係を可能にしたのか、成功の秘訣を少し分析してみたいと思います。

沖田 四日に亘つて、生活を共にするというのが大きいんでしょうね。学生と教師が生活を共にすることもありま

すが、学生同士、たとえば文学部の学生、法学部の学生というように、キャンパスでは異文化ともいえる人たちとともに過ごす時間というのはとても貴重なんですね。教師自身も、ふだんと違うタイプの学生と接する機会を得られる。

伊藤 参加者がとても多様だということですね。

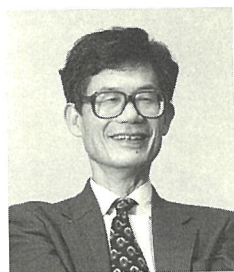
沖田 それに個人個人が努力しないと楽しいツアーにはならない。一人ひとりが自分の役割を自覚して、積極的に集団行動に係わつて行こうとするから、出会いが生まれ、濃密な関係が生まれてくる。

伊藤 キャンプでは、作業のようなハードルが課されるわけでしょう。それがお仕着せではなく、自主的に係わつていける工夫がなされている。その辺りにうま

くいつているポイントがあるように感じるのであつた。

百合野 われわれの学生時代は、大学に入つたんだからと、古本屋に行つて難しい本を買ひ込む。授業についても、当然、教科書を買つて、勉強する態勢だけは整えました。ところが最近の学生はそんな意識を持っていません。でもキャンプに参加する学生からは、よし、函館に行くぞ、函館に行つて新島を見つけるぞ、という大変強い意気込みを感じました。

沖田 教師が学生に出会えてうれしく思うなんてことは意外と少ないんですが、函館キャンプを共にした学生は、教師にそんな思いをさせるんですね。大学に帰つてきても、法学部生なのに、文学部の私の授業に顔を出し、研究会にも参加



伊藤彌彦氏

いとう やひこ／1941年東京生まれ。ICU卒業、東京大学大学院修了。専攻は日本政治思想史で、明治国家形成期の秩序観や日本の教育を研究。ゼミの学生には目下、「以言伝心」、言葉をつうじて相互認識をひろげることをすすめている。著書に『のびやかに語る新島襄と明治の書生』（晃洋書房 1999年）、「維新と人心」（東大出版会 1999年）など。

するようになる。なんだか自分のゼミの学生のような錯覚さえしてしまうくらい身近な存在になってくる。学生同士も帰ってから交流を深め、さらに新しい出会いを作っていく。そういう効果があるようです。

伊藤 それだけ今の学生は、人間関係を作るきっかけを持たないんでしょうね。三山 キャンプへの参加動機として、友達を作りたいからという声が本当に多いですね。

伊藤 友人と一緒に参加を申し込んだけど、友人が抽選に漏れたから自分もやめると言い出す学生もいたりして、みんな人間関係が狭いんだなという思いもさせられます。

沖田 今の時代、十人いても十人がまと

まることはまずない。だいたい三つくらいのグループに分かれるものですが、函館キャンプのように五十人行って、みんながまとまるというのは奇跡に近いですね。

百合野 商学部では、毎年新入生歓迎会を企画しているのですが、一回目は平尾誠二さん呼びまして、非常に盛り上がりしました。ところが二回目以降は誰をお呼びしてもなかなか人が集まらない。新島記念講堂で開催した講演会にたったの二十人しか集まらないということすらありました。どうしたもんかと考えた揚げ句、きちんとした企画はないがとにかく集まろうと四月中旬に開催してみたんです。そうしたら出席者が凄く多い。そこで彼らを観察してみると、互いに携帯電

話の番号を教えあつて、せっせと友達作りに励んでいるんです。これが六月になると、もうそれなりの人間関係ができ上がっているから集まらない。商学部の学生数は非常に多いわけですが、みんな求めているものが何かある。それを刺激する機会を与えてやる必要があるのだと思います。最近ある会議の席で、新入生全員の一人ひとりに全学部の全教員が対応する方法が何かないものだろうかと話し合っただけです。これだけの規模になっても何か方法はあるはずだし、きっとそれなりの効果は得られるはずだ。函館キャンプを経験した私なんかは、特にそういう気持ちが強かったですね。

三山 産業関係学専攻では、入学式の翌週の日曜、月曜に新入生歓迎合宿を行っ



ているんです。一泊二日の合宿の中で学生たちは友人を作っているようですが、私たちとしてはそうした濃いつき合いの場を提供することによって、四年間の豊饒な人間関係を生みだすきっかけにしたいと願っています。

沖田 教育学専攻でも、毎年五月に合宿を行っていますね。ただ公式的な行事は一切行わない。大学院生が少し話をして、後はひたすら遊ばせます。教師も老体に鞭打ってテニスなどをして、一緒に遊ぶ。それでいいですね。こちらからは何もセッティングしない。近年、同志社にはかなり上質な学生が入って来ている。た

だ人間関係の作り方が分らない。だからそういう視点で、教師は彼らの肩をポンとたたいてやるだけでいい。

伊藤 そういう話を聞くと、大規模学部の法・経・商は、それをどうやってやればいいんだろうという気持ちになります。

沖田 学生とのつき合い方なんです、学生を子供と見なしてつき合うのか、あるいは少々未熟だけれど大人としてつき合うかですね。函館キャンブはまさに後者の方で、上から見下ろすのではなく、同じ作業を分担していくことに意義がある。百合野先生なんかパーベキューをしても、元ボリースカウトですかとたずねたくなる位とても上手なんです。それを見て学生たちも尊敬してしまう。函館キャンブのいいところは学生と教師が同じように作業を分担して行うところにある。

久山 対等というのがいいんでしょうね。学生は小学校から、へたをすれば幼児期から一方通行の教育を受けてきたわけ、もう拒否したいくらいの心境になっている。大学に入って先生と対等のつ

きあいを持てるとそれがはじけるというか、本来の自分にやっともどれるような感覚になるんじゃないでしょうか。

沖田 新島先生には、学生を丁重に扱うことという主旨の遺言がありますよね。学生を丁重に扱うとはどういうことかと考えると、それは学生に日常的な場で接することだと思えます。しかし、悲しいかな大学では不可能に近い。ゼミも、終われば学生はサーッと帰って行くし、教師も忙しい。そういう意味では、日常的に接してあげられる函館キャンブは、学生を丁重に扱える実践の場だといえると思うんです。中には、扱いにくい学生がいる。団体行動に馴染めなくて、必ずあさつての方を向いている奴。そんな学生もさつきおっしゃったように徐々に馴染んでくるんです。

久山 団体行動に反発する学生は確かにいます。どうやって宿舎を抜け出してやろうかなどと考えている学生。そうしたユニークな学生が、かえってグループを和やかにし、やがてコミュニティの中心になったりする。見ていると面白いし、人それぞれがいろんな役割を持っている

なと感心します。

沖田 またまた新島先生の遺言の引用で恐縮なんです、個儼不羈な学生といえますでしょう。ちよつと集団からはみ出す学生なんです、同志社のいいところは、こうした学生を突き放さないし、引き戻さない。適当な距離を置いて見守ってあげる。キャンプがまさにそうなんです。例えば団体行動からはずれて、カップルを作りどこかへ行こうとする者がいる。「お前たち、どこへ行くんや」と言いつつ、引き戻さない。適当な距離をもつてつけていくだけ（笑）。

三山 カップルが生まれたことはあるんですか。

久山 ゴールインした人たちもいるようです。

三山 それはいいことです。同じ大学でも、函館に行かなかつたら出会わなかったかもしれないのですから。

伊藤 やつぱり出会いの話にもどりましてね。

久山 学部を越えた出会いというのが大きいと思います。一つの学部集まる人はどうしても均質化します。それが学

部を越えて交わることにより、触発され、違った価値観が生まれるきっかけにもなっており、これがキャンプを魅力的にしている要因でもあると思います。ですから、大きな人数を抱えた学部の場合も、大変だろうと思いますが、何か学部相互に交流できるような場面を持たれることは大切じゃないでしょうか。

伊藤 学部を越えた交流の場となると、サークルなんかだと思んですが、サークルは学生の自主活動の場ですから、教師の側も少しも参加する工夫というのが必要なのかもしれません。

沖田 学生の関心は、とにかくサークルとアルバイト。これはある意味で健全だと思えます。これは私たちにも問題がある。授業が学生の出会いの場になっていない。学問というものが、学生と学生をつなぐ接点になっていない。キャンプを経験した者としては、何とかあの函館キャンプのいい面を教室に持つてこれなものかと考えます。

函館キャンプの魅力をキャンパスへ

伊藤 それでは、函館キャンプの良さを大学教育に生かすという視点で意見を伺ってまいりましょうか。

百合野 これは回答にならないかもしれませんが、商学部の新入生歓迎会ではサンドイッチパーティーを行っているんですが、その席でカレッジソングの歌唱指導を行い、みんなで歌うんです。まず応援団の模範演技を見る。これが模範かどうかは疑問の余地がありますがね。その後、吹奏楽部をバックにみんなの前で私が歌いながら指導するんですね。それ以来、百合野先生の試験は答案用紙の裏にカレッジソングを書けばOKということになりましたね（笑）。でも、私は同志社のような由緒正しい私学に來ている以上、創立者のことを知る、カレッジソングを覚える、これは筋だと思わんです。そういう意味もあつて、私のゼミの一回目は、自己紹介を済ませた後、教室を出て、歩いて新島先生の旧邸を通つて、若王子へ行き、お墓に参つて、円山公園に降り、そこでコンパをするんです。行く前はブツブツ言っていた学生が冷たいビールを飲みながら今日はよかったと言っ



第18回(1999年)函館キャンプ

ています。そして、サークルや友達とまた行く奴も出てきます。

沖田 私ゼミでは、同立戦に行くんです。考えれば、そんなに意味のあることではないんだけど、みんなで応援歌を歌い一体になる、この経験は捨てたもんじやない。話は変わりますが、みなさんは同志社の道通歌をご存知ですか。私はあ

れを振り付けつきでやるんです。

久山 昨年の函館キャンプでは応援団の団長がやりました。

三山 あれはいいですよ。感動のあまり泣き出している人もいました。

沖田 函館キャンプは、本当によくできているんですね。道通歌一つをとってみても、新島、新島といわなくてもスーッと入って行ける仕組みのようなものができ上がっているんです。これは何とかゼミとか、われわれの日常活動に取り入れられないものかと、つい考えてしまっていますね。

百合野 函館キャンプのスケジュールをゼミ合宿に取り入れましたが、あれはきつい。とても一人で引率できるものじゃないです。教員が三人、学生課から二人の参加を得て初めてあのスケジュールがこなせるんだと実感しましたね。

沖田 私たちも職員の方と親しくさせていただく機会というのはないんですが、キャンプでかなり親しくなりましたね。

三山 教員間でも、学部を越えて親しくお話しできるようになりましたね。

久山 新任の先生にも参加していただい

たらどうかという声もあります。

三山 実は、私は同志社の卒業生じゃないんです。同志社の教壇に立っていますから、新島襄の事を少しは知っていますが、函館キャンプに行つて初めて新島襄が魅力的な人なんだと分かったんですね。今の大学生の世代にとっても凄く魅力的な人なんだろうと感じますし、新島襄がこういう人だから、同志社の自由な校風が生まれたんだと納得できる。

伊藤 個人的な事をいえば、私も函館に引率者で参加することが決まってから新島全集を読み始めたんです。するとこれが面白くて、ついに新島研究にのめり込んで今に至ったという次第です。

久山 新島襄の魅力は、躍動的で現代に通じるセンスを感じることです。ですから、すんなり入っていきけるし、同志社の設立や校風も理解できやすいですね。

沖田 新島先生も、あの時代を生きていくには、まして脱国を企てるにあたっては不安で、不安でしかたなかったと思うんですね。そうした心の軌跡を身近に感じるといえるのは、かなり重要なことです。時代はいくら変わっても、青年期のあの

不安感というものには独特のものがありませんからね。

伊藤 新島には、青年らしい青年像を見ることができると言えます。こんな言い方をすると僭越で、失礼なんです。大学教育の教材として、新島裏の人生は好都合なものなんです。

沖田 同志社教育の基本は、教師が学生と接するというところに尽きるところ。いろんな機会に学生と直に接し、共に何かをする機会と場を作っていくというのが、同志社の教育の活性化につながっていくんじゃないかという気がするんですよ。そして函館キャンプというのは、同志社の教育を活性化するサンプルになり得るんじゃないかと思えます。

伊藤 その函館キャンプへの参加希望者が減ってきているというのが気になります。

久山 情報はいろいろなチャネルから入っていると思うんですが、詳しく知るとその内容で二万五千円なら函館へ行きたいと、参加を希望する学生も多いのではないかと。PR不足という面もあると思います。

三山 安いから行くという学生が多いです。それです。実際にやってみてこんなに面白かったのかと実感して帰ってきます。

沖田 動機は何でもいいんですよ。意図しない仕掛けというのもあるわけですから。だから、「安く行けますよ」だけでもいいと思うんですよ。新島がどうのというよりも、「教師と一緒にきますよ」と、これくらいいい。後は、あの感動をどうやって他の学生たちに伝えるかですね。先程もいいましたが、キャンプに参加して思うのは、同志社の学生って上質だということです。そういう発見は、日常の講義なんかではとても経験できませんからね。

百合野 私の場合、同じ感覚になったのがヨークのサマープログラムですね。学部を越えて、しかも少人数で一定期間一緒に生活し、同じことを考えるからでしょうか。ヨークで聴いた学生の歌うカレッジソングのハーモニーは格別でした。

沖田 松下村塾も適塾もそうなんです。同志社も最初は私塾として出発するわけですね。少人数の学生がいて、教師

と生活を共にする。学校が大きくなるにつれ、そうした私塾的な良さが希薄になっていくわけですが、同志社教育の原点というのは、私塾時代の学生と教師との密な関係にあるような気がします。

久山 欲をいいますと、函館キャンプに参加した学生はそこで様々な発見をするわけですが、それを学校生活でどう生かすかですね。ゼミやサークルなどがありますが、他に生かす場があってもいいと思います。現在は、社会とつき合うセンスが問われる時代だと思うんですが、そんな時代にあつて函館での経験を生かせる環境が整わないものかなと思います。あるね、ボランティア活動であるとか。あるいはフレッシュマンキャンプを企画し、函館キャンプに参加した学生に、その経験を生かしてスタッフとして参加してもらうというのでもいいでしょう。そこで、学生たちは函館で体得したものを、他者へ活かし、次の世代に伝えることができるわけですね。そういうしくみを作ることによって、学びながら教えるという実践的な教育の場が生まれるんじゃないかと思っています。函館キャンプとい

うのは一つのアクティビティだと思うんですが、そうしたアクティビティがいくつも集まって同志社大学の特徴ある課外活動プログラムがつくりあげられたらいいなと考えています。

沖田 考えてみますと、今は同志社らしい授業というのは少なくなってきましたね。私らの頃は宗教学が必須だったし、チャペルアワーの時は授業がなかった。

そういうものが無くなった今、同志社らしさを何に求めたらいいのか。片や学生が、専門教育を早く受けたいとか、資格を取りたいと言いつつ、専門学校と変わらなくなる。大学と専門学校はどこが違うのか、あるいは数ある大学の中で同志社らしさって何なのか、今までこうした差異性を置きざりにしてきたように思いますね。面白い話がありましてね、ある企業でプロジェクトを立ち上げたんですが、どうしても人間関係がうまくいかない。今後のこともあるんで丸く収めたいが……というので同志社出身者たちに白羽の矢が立ったそうです。彼らは遊びもうまいし何とかするだろうと。すると意を挫いて見事に事後処理だけではなく、

プロジェクトを軌道にのせたというんですね。それは何かというと人間関係の機微に通じていて、まとめ上げるのに優れていたわけですね。そうした同志社らしさというか、同志社タイプの学生を生み出す教育というのが、だんだん見過ごされてきているような気がしますね。同時に、そうした「同志社丸出し」の学生たちを生み出してきていたものは一体何だっただろうと、考えさせられますね。

百合野 私の学生時代は、天気がいいとゼミをつぶしてよく鴨川へ出かけましたね。出町の商店街で天ぷらなんかを買って込んで三角州へ出て、酒を酌み交わしながら先生を囲んでいろいろ話をするんですね。今の学生は、こういう事を求めない。ゼミを初めて持った頃はそういう企画をしたんですが、やがて「先生、橋の向こうから人が見えますよ」とか、「どうせお酒を飲んだつたら木屋町へ出ましょう」とか、私たちが先生と親しく話せた「空間」は、今の学生にとっては格好が悪いことに映るようです。

えたように思います。既成の概念がふつ飛んでしまつて、学生の間にも自分も参加して何かやりたいとか、自分を表現してみたいという気運が生まれました。とにかく駆けつけて何かする。集まった人たちは、闇の中でワイワイやりながら組織が生まれ、活動が生まれていく。

沖田 あの時、私のゼミでも寄付をしたんです。ある学生が「先生、コンパなんかしている場合じゃないですよ」といい出して、コンパ代をみんなが出して沖田ゼミ一同で京都新聞社を通じて寄付をしたんです。私もジョーンときましたね、まさか学生からそんな言葉を聞くとは思わなかったこともあって、非常にうれしかったですね。

久山 以前とは氣質が変わってしまったという学生と、今のお話のような行動をとる学生と、同じ学生なんですが何がどう違うのかなと思うんですが……。

沖田 行動しようという意欲は、みんな持っているんだと思うんです。ただ私たちなり、大学なりが、学生の持つているそうした一面を引き出すチャンスが提供できない。ゼミなんかでもそうですが、

本当に発言しないですね。思っていることはあるんですが、自分を出すすと浮いてしまうと思うのか話さない。発言すれば、コミュニケーションを通じて相手の意見も引き出せると思うんですがね。

伊藤 私も演習の中では、少人数に分けて討論させているんですが、グループの中でよくしゃべる学生がその場を取り仕切ってしまう。しかし、よくしゃべる人が一番考えているとは限らないんですね。ちよつと引いて聞いている。しゃべらなければ自分の意見も通らないはずなのに。

百合野 私の学生の頃は、学園紛争でしょつちゆう休講だったこともあって、授業に出るためにキャンパスに来ていたわけではない。でもサークルのボックスには誰かいたし、友だちの下宿を転々としながら情報を共有していましたね。一方、今の大学はそういう場になっていくだろうか。大学に来て、必要な授業に出て、後はさつさと帰ってしまう。大学にはいろんなコミュニケーションの場があるわけだけど、学生はそのうちのいくつを経験しているのだろうかと考えてし

まいます。

沖田 今日、教職志望の学生を前に話してきたんですが、教えるということは信頼関係があつて初めて成立するもので、この人を信頼し、この人に教わりたいという意志を前提にしている以上、出席を強制してはならない。そういう意味で、君たちも教師との間に信頼関係を結ばないなら、あらゆる講義は無意味だよと話してきたんです。単に学びたいだけなら、家で本を読むなり、コンピュータで情報を得ればいいわけですから。一方、われわれ教師からすれば、学生からどうやって信頼を勝ち取るかということになるんですが、信頼してくれている学生はよく話に来てくれますが、そうでない学生はやはり身構えている。函館キャンパスに話を戻しますと、そこでは信頼関係が作れますよね。だから間違いなく「学び」があります。「教え」があるかどうかは確信が持てませんが（笑）。

伊藤 今日は、函館キャンパスについての座談会ということで、かなり熱く語っていただきましたが、そのこと自身、われわれが感銘を受けた証しであろうと思

ます。第一回から数えて十八回。同志社の歴史からすれば、たかだか十八年の歴史ですが、そこに結晶しているものは今日、皆さんのお話からも伺えるように、現在の閉塞した教育環境を打ち破るヒントが確かにあるように思います。応募者が減っているという寂しい現実がありますが、このキャンパスの精神を継承していくとともに、もう一段高いレベルへ発展させられるアイデアがあればぜひ傾聴したいものだと思う次第です。今日はお忙しい中、ありがとうございます。

（一九九九年二月九日収録）

手作りの函館キャンプ

(一九九八年度参加)

上林苗緒

(文学部社会科学科二年次生)

「この夏に何かやってみたい」「どこかへ旅してみたい」漠然とそう考えていた入学して間もない私の目に、飛び込んできたのが函館キャンプのポスターでした。様々な学部や上級生の人達と出会え



左が上林さん

るということと、値段の安さにもひかれて迷わず応募しました。

三泊四日のキャンプでは、実に様々なイベントや企画がありました。その中でも、学生が主体となっていくことに大きな意味があったと思います。自分達が主体的に動くことで、互いの良さや個性を発見し、キャンプをよりよいものにするのができたのではないのでしょうか。学生の手でつくっていくそれが函館キャンプの持つ、大きな魅力であったと思います。

今振り返ってみて、もしあの時函館キャンプのポスターを目にしていなかったら、自然あふれる函館の地で素晴らしい経験をするこもできず、また、今も集まって話す友人達とも出会えていなかったのかと思うと、不思議な気がします。函館キャンプは「大学生活を送る」とより「大学生活に慣れる」ことに一杯だった私に、様々な出会いの場を与え、新たな方向性を見出してくれたものだと感じています。



私の函館キャンプ

(一九九八年度参加)

海野利春

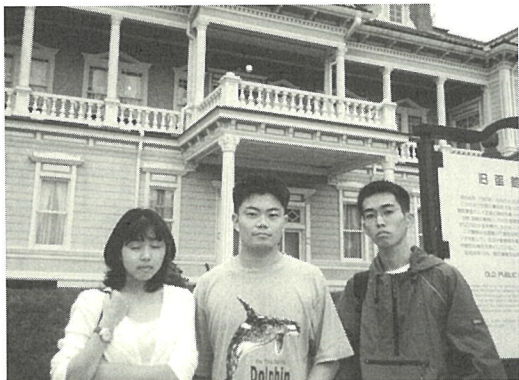
(法学研究科博士課程(前期)一年次生)

私は二回目の申し込みでこの函館キャンプに参加することができました。実は一年次生のとき友人と一緒に申し込んだのですが友人のみ参加することができ、私は補欠で落ちていたのです。一年次生の時は「たくさん友達をつくりたい」と思ってた申し込みでしたが函館キャンプから帰ってきた友人に「函館キャンプ絶対いい。友達もたくさんできるから絶対申し込め」と言われたことも二回目の申し込みをした理由の一つです。

私は、他の班に函館の名所を指示して絵を描いてもらう班だったので、函館という土地を事前に調べることになり少し詳しくなりました。自分達の企画がうまくいくのか不安だったのですが、他の班が絵を描いて無事帰ってきたので安心しました。

キャンプの中で最も印象に残ったのが函館の夜景です。プログラムの都合で残

函館キャンプに参加して



中央が海野さん

念ながらゆつくりと見る事ができま
 さんでしたが、学費を稼ぐためのアルバイ
 トと授業の両立で忙しい毎日を送って
 私にとって、ほっと一息つき、学生ら
 しい気持ちを取り戻せた忘れられない場
 所となりました。

函館では新島襄のビデオを全員で見た
 のですが「鎖国の時にアメリカに行くこ
 ういう勇気と行動力の持ち主の新島襄つ
 すこい」と改めて思いました。キャンプ

終了後も一緒に旅を続ける友人に出会
 い、創立者を尊敬することも出来る函館
 キャンプに参加できてとても良かったと
 思います。



思い出と出会い

(一九九九年度参加)

佐藤奈穂子

(文学部社会学科三年次生)

湖に投げた小石は水面に波紋を描く。

函館キャンプは、その「小石」みたいだ
 なあと思う。

現在三年次生であるが、環境の変化に
 戸惑いながらも幸い、新生活はまずまず
 のスタートを切った。なにか「同志社な
 らではの思い出」を残したい。そう思っ
 て函館キャンプに参加した。

最終日、参加者全員が感想を述べる。
 なぜか涙が出て言葉に詰まった。「みんな
 にうまく気持ちを伝えられなかった」と
 話したかった。その時、「がんばれ」とい
 う声が聞こえた。うれしかった。

わたしの「声」が届かない。ずっと、

もどかしさやさみしさを感じていた。で
 も、そのひとはストリートに染み込
 んできた。振り返ると「声」をさえぎる
 壁を自分の中に作っていたのかもしれない。

京都に帰ってから、「がんばれ」の彼女
 に手紙を書いた。誕生日も近かったし、
 何より「ありがとう」と言いたかった。
 返事は、わたしの宝物である。秋学期に
 入ってから、波紋が広がるようにして



前列右側が佐藤さん

徐々に交流も広がってきた。世間話から真剣なことまで話せる仲間に巡り会えて、本当に良かったと思う。



ファインダーを通して 見た函館キャンプ

(一九九九年参加)

角谷智司

(工学部電気工学科四年次生)

「函館出身の有名人と言えば?」、「ニイマジヨウを知っていますか?」。函館キャンプ恒例のグループワークで、僕らの班は8ミリビデオカメラ片手に函館の街をレポートした。

当たり前のことだが函館や函館キャンプへの思い入れは班の中でも皆違う。ある人は新島襄や歴史に、またある人は函館のグルメに関心がある。GLAYの大好きな女の子もいる。結局VTRを使ったクイズ形式の発表になったが、インタビューや取材内容にバラエティが出て楽しい発表になった。新島襄の遺髪を求めて同志社ゆかりの教会へ行ったメンバ

ー。朝市や観光スポットで、地元の人と漫才のような会話を収録して楽しませてくれたメンバー。みんな自分にできること、得意なことをやって発表を終えたら、何か達成感と友情みたいなのが湧いてきた。

今回僕は函館キャンプを隅から隅までビデオカメラに収めたが、函館キャンプ最終日の感想発表会を見直してみると多くの人が次のような事を言っているのに気がついた。「同志社にもこんなに個性豊かな素晴らしい人達がいたのだと知りました」。これは六年間同志社にいた僕の感

想でもある。また「未知なる人との交流」によって「自分にもこんなことができるんだ」という可能性の発見もあった。

新島先生が国禁を犯し脱出した函館で僕はこう思った。未知なる土地、未知なる人へのアプローチは危険なことやいやなこともあるけれど本当に楽しい。あらためて人が好きになった。



石碑左側が角谷さん

熱き “洗礼”

廣川裕美子

河合塾講師
（'84年大学経済学部卒業）

予備校の教壇に立つ私にとって、関関同立クラスの担当は、とても楽しい仕事だ。元気のよい後輩を送り込めるようにと、自然と熱がはいる。そんなふうに関関同立の一年間がかり合おう中で、必ず言うことが、「キャンパス見学に行きなさい」だ。偏差値からではなく、自分の将来のまなびやを、自分の目で見て確認してほしいからだ。十八、十九歳の感性は鋭いものだ。彼らが見つめるのは、校舎の美しさ、大学生の雰囲気だけではないと思う。同志社を志望するようになるものは、同志社の精神の一端に、出会いひかれたものではないだろうか。

私自身が函館キャンプに参加したのは、三回生の九月のこと。私たちは新島キャンプと呼んでいた。呼びかけ人の一人であった経済学部の、今は退職された小野高治先生のゼミの幹事だったことがきっかけだ。たしかに二万円で北海道に行けることは魅力だったが、「大学生になって、なにも先生と修学旅行みたいなことをしなくても」という思いも強く正直な話、行きたくない、やめておこうが本音だった。だから先生の「参加者が足りない、腰の私は釘をさされ、半ば強制的に連れて行かれたというのが本当のところだ。そんな私がこのような函館キャンプはいいよという手記を書いているのだから人生って面白い。函館では様々な出会いや出来事があったはずだ。ただ十五年以上の歳月

に記憶は洗い流されて、書き記そうにも浮かんでくるのは断片的なシーンばかりだ。

ただその中で一枚だけ、強烈に焼きついてるシーンがある。脱国の碑の前だ。私はそこで、自分と同年の二十一歳の若者であった新島襄と出会った。その瞬間だった、幕末の閉塞した状況の中に埋没するのを潔しとしなかった彼の生きざま、新しい人間と新しい世界を発見しようとして命懸けで脱国を敢行した彼の情熱が、熱い波となつて私を覆ったのは、「洗礼」——同志社人としてあるための洗礼を受けた気がした。それから後この経験が「現状に甘んじて流されて生きてないか」「人を信じ未来を信じて、そして行動しているか」と内なる声として私に囁きかけてくる。それが私の人生の幾多の局面で、支え、正し、そして奮い立たせる財産となってきたことはいまでもない。私にとっては、函館キャンプは新島襄に出会う旅であった。それはなおかつ同志社の精神を引き継ぎ、同志社人になるための旅であったのだろう。この大学にひかれ入学した多くの学生がこの企画に参加することを願わずにはられない。

（誘ってくださった恩師小野先生の気持ち、今はとてもよくわかる。何だか笑ってしまった。）

函館は自分の原点

読売新聞大阪本社記者
(’86年大学文学部文化学科卒業)

田村 創

一九八三年から一九八五年まで計三回、参加させていただいた。きっかけは前年、一回生を対象に開かれた「フレッシュマンキャンプ」。新島さんの故郷・群馬県安中市を訪れ、「なぜ同志社に入ったのか」「大学で何をするのか」といったことについて他学部の学生や教授と連日、意見交換した。「安中から函館へ」は私にとって自然な流れだった。

函館キャンプで印象に残っているのは▽大学の後輩というだけであれほど歓迎してもらえるのか、と感激した現地卒業生との交流会▽函館山から夜景を見た後、ロープウエーに乗らず、真っ暗な道路を約一時間半かけしゃべりながら宿舍の旧ロシア領事館(当時、道南青年の家)まで歩いて下りてきたこと▽未明まで飲んで騒いだ後、早朝に宿舍を抜け出し、「脱国の碑」の拓本を取りに行ったこと等々。

大学が主催する「公式キャンプ」は一見、規則づくめのイメージがあるが、函館キャンプについては、最低限のルール以外は一切が学生の自主運営に任ざれていたように思う。本来は煙たいはずの教授陣とも、一緒に観光を楽しんだり、酒を酌み交わしたりと、ふだんとは違う「人間くさい」姿に接することができた。マッサージが得意という末光力作教授(故人)に足をもんでもらい、恐縮しながらも満悦だった男子学生もいましたっけ。キャンプ解散後も、地平線を追い求め、気の合った仲間十人

が函館から札幌を経由、日勝峠から富良野までを車で疾走した一九八四年や、就職試験の勉強もせず札幌から網走、知床半島、阿寒を経由、日高から札幌まで約一二〇〇キロを乗用車二台で回った一九八五年と思い出は尽きない。

学部も、生まれ育った土地も環境も、大学に入学した動機も趣味も違う学生、教授、職員約三十人が「新島襄」「函館」という共通のキーワードで集まるのが函館キャンプ。そんななかで何日も共に生活すると、いやでも素の自分を出していかねければならなくなる。中途半端にかっこをつけたりすると、かえってしんどい。

それは同時に、自分自身を見つめ直す好機となった。「ジャーナリストになる」「自分の塾を作る」「ロボットの研究をしたい」……。参加者と繰り返し将来の夢を語り合うなかで、いまの新聞記者としてのバックボーンが作られたように思う。私の原点は函館にある、とさえ思う。

キャンプに参加するたび、自分がひと回り大きくなったような気がした。常に新しい出会いや発見があった。いまなお、つきあいのある友人、先輩諸氏はこのキャンプで知り会えた。これら多くの人々は、かけがえのない存在であり、同志社の学生として函館で同じ時間を共有できたことをいまなお、誇りに思う。